

- 1 左右左 いまの能にも「左右」とか「大左右」とかよばれる舞の型があり、まず左のほうに向きながら手を返す。右から始めることはない。
- 2 清見原の御時 「天武天皇、芳野河に御幸して、御心を澄まし、琴を弾じ給ひしに、神女空よりふり下たり、清見原の庭にて、廻雪の袖を翻しけれども、天暗うして見えざりければ、彼の玉を出だされ、仙女の形を御覧じき。玉の光に輝きて「少女子が少女さびすも韓玉を少女さびすもその韓玉を」と五声うたひつつ五度袖を翻す」（源平盛衰記）卷一「五節始事」。
- 3 私の遊楽 吉田博士は「私」を「彼」の誤写かと疑われ、能勢博士は「私」の形で「我々どもの」と訳されたが、共に従いがたい。上の左右左が公的な雅楽の型であるのに対し、私的な民間の芸能をさしたのである。
- 4 近江の犬王 日吉座の能の名手。一八五・三六八頁参照。
- 5 その者 一四三頁注2参照。
- 6 人形の絵図 一六三頁参照。
- 7 駿河舞の書 どのような文献かは不明。駿河舞は、東遊のうちで舞われる。「昔、駿河国有度浜に、神女降りて舞ひしを、野叟のまねび伝へて舞ふを、今は駿河舞とて、東遊にするはこれなり」（袖中抄）。
- 8 維摩会 毎年十月十日から七日間、興福寺で行なわれる法会。「維摩経」を講ずる。そのあと、リクリエイションとして延年を演ずるのである。「風姿花伝」第四篇（七五頁）参照。

付 載

- 「五音」
- 「夢跡一紙」
- 「金島書」
- 書簡

五音

「五音」は、観世宗家に所蔵される写本が、昭和五年、故片山博通氏によって発見され、昭和七年に宗家から複製刊行されたものである。したがって『世阿弥十六部集』には入っていない。

内容としては「五音曲」とだいたい同じだが、五音曲そのものを説くことよりも、その実例を示すことを主とする。そのため、芸論としてはあまり高い価値をもつとはいえないけれど、挙げられている例曲が研究資料として重要である。すなわち、現行曲の詞章と世阿弥当時のテキストとの差異が本書の引用によってある程度までわかること、現行曲のあるものが既に存在する謡ものから詞章を借用しているなど制作プロセスがわかること等である。

しかし、さらに重要なのは、能の作者考定に基本資料として高度の信頼性をもつことだろう。特に、世阿弥の能に関しては絶大な価値をもつ。この点について、曲名だけで作詞者・作曲者の名がない曲は世阿弥の作であるという解釈を出された能勢博士の卓見は、本書の資料価値を決定的なものとした。

観世宗家の所蔵本は上下二冊の別本であるが、ともに観世座七世の大夫宗節の筆と認められる。「祝言」「幽曲」「恋慕」「哀傷」の四種の音曲を収める上冊は、曲趣の説明の大半や、例曲の引用文の大半を省略した略本で、著しく簡略である。「闌曲」を集めた下冊は、上冊ほど省略がはげしくはないが、やはり略本である。最近、下冊の完本が世に出て、江島伊兵衛氏の鴻山文庫に収められた。

底本としては、鴻山文庫本が最適であろうけれども、まだ公刊されていないものであるし、芸論としての観点からは、略本であることはあまり支障が無いと思われるので、観世本を底本とした。

五音上

当道音曲のこと、和州・江州、または田楽節、この不_レ可_レ出_レ。まづ、和州において申楽の芸人多しと云へども、亡父観世節を以て、当流庭訓とせり。江州は、大王が曲なり。田楽節は、龜阿弥、これまた一流なり。この達人どもは、昔の道になりて、今は古体の音声、伝_レて、形のごとく当流に亡父の一流を相具して、この道を記して、以つて三道(種・作・書)を伝へ、芸能を習道して、当道を守るゆゑに、斯曲おのづから広まりて、応永年来よりこのかた、当世の幽曲となれり。しかりと云へども、音曲を万人翫ぶばかりにて、曲舞・只謡の音声の性位の分け目をも知る人なく、まして、祝言・望憶の声懸りの変り目も分明ならねば、しばらく曲道を五箇条に分ちて、祝言・幽曲・恋慕・闌曲と定めて、五音と名付く。これは、音曲習道の目安として、五音の曲味をよくよく拈弄して、習道あるべきものなり。しかれば、近年

あまねく耳慣れし謡・曲舞の数々、また先達の古曲少々、大概記すところなり。よくよく見分けて、稽古あるべし。

- 1 この 底本は以下およそ三字分ほど欠く。能勢博士は「間をば」かと推測された。
 - 2 大王 近江申楽の日吉座に属した名人。のち、將軍義満から道阿という号を与えられた。応永二十年(二四一)没。
 - 3 龜阿弥 田楽新座の龜夜叉の号。「龜阿、音曲の先祖なり」(申楽談儀)。
 - 4 その者 名人。一四三頁注2参照。
 - 5 形のごとく いちおう。
 - 6 幽曲 底本「遊曲」。「遊び」は宛て字。応永年間このかた、観世ふうの幽玄な曲が勢を得たのであろう。
 - 7 曲舞 曲舞系統の節。いまのクセに見られる。「曲付次第」(二四九頁)参照。
 - 8 只謡 小歌系統の節。いまの上歌などが典型的。
 - 9 恋慕 この下に「哀傷」を脱したのであろう。
- 一、祝言 安全音と名付く。安く全き内、応曲あり。伏見 亡父曲付。
- 指声 それ久方の神代より、天地開けし国の初め。

足引山

指声 足引の山下水も絶えず、浜の真砂の数積りぬれば、今は飛鳥川瀬になる恨みも聞えず、小石の敲となる悦びのみぞあるべき。しかれば天に浮かめる浪の一滴の露より起り、山河草木恵みに富みて、国土安全の当代なり。千代木の風も静かにて、朝暮の雲も収まれり。いざここに、わが代は経なん菅原や、わが代は経なん菅原や、伏見の里は久方の、天照す日も影広き、瑞穂の国は豊かにて、民の心も勇みある、御代の治めは有難や、御代の治めは有難や。

松が崎 十郎元雅曲。
寂寞たる深谷 これを略す。

淡路 亡父曲。
それ天地開闢の初めと云つば これを略す。

富士山
そもそもこの富士山と申すは これを略す。

吉野山 元雅曲。
指古への賢き人の遊びけん 略。

敷島
それ敷島の国つ業は 略。

五 音
須磨 付源氏。

指これは津の国須磨の浦に 略。

静 亡父曲。
次第花の跡訪ふ松風は、花の跡訪ふ松風は、雪にや静かなるらん 略。

桜川
これに出でたる物狂ひの

通小町
指 忝けなき御譬へなれども、悉達太子は

井筒
さなきだに

松風 亡父曲。
心尽しの秋風に

融
陸奥はいづくはあれど塩竈の

葵上
一声 三つの車に法の道

箱崎
一声 箱崎の松の葉守りの神風に

汐汲 龜阿曲。
指それ汐を弄する身にあらずは

盛り久 元雅曲。

指南無や大慈大悲の
蘇武

それ遠く異朝を引いて見るに、漢の帝の御時

宇治山 金剛曲。

淨藏法師 父王の盛徳

布留

初み雪布留の高橋見渡せば 亡父作書。

恋重荷

それ及び難きは高き山

班女

げにや祈りつつ

六月被

げにや数ならぬ

花形見

われ応神天皇の

松風 後の段。

げにや思ひ内にあれば

難波

或るは男山の

錦木

陸奥の信夫

王昭君 金春曲。

これは唐合甫の里に

盲打 亡父曲。

クドキ 梓の弓の

松浦 福来曲。

生国は筑紫肥前

哀傷

一生は風の前の雲

江口遊女 亡父曲。

それ十二因縁の

弱法師 元雅曲。

それ鴛鴦の衾の下には

女郎花 亀阿曲。

をみなへしは女郎花と書きたれば

当麻

有難や

隅田川 元雅曲。

人の親の心は

春永

それ生死に

求塚 亡父曲。

されば人、一日一夜を経るとだに

舟橋

往時渺茫として

禿高野 亀阿曲。

花は散つて根にあれど

橋立

それ親の子を思ふこと

鶴

指悲しきかなや

鶏飼

指げにや世の中の

千寿

さても本三位の中將

忠度

恥かしや亡き跡に

高野 亡父曲。

聞きしに越えて

1 応曲 意味不明。『世阿弥二十三部集』は「恋曲」と

翻字するが、それでは祝言曲の本旨に合わない。『五音曲』に「このやすく云ひ流したる懸りを、大事に思ふ宛

てがひ、また大事なり」(三三〇頁)とあるので、「懸曲」の誤写かもしれない。

2 千代木の 以下「収まれり」まで下歌かと思われる。また「いざこに」から「有難や」までは、拍子当たりでいえばトリで始まる上歌。したがって、指声(サシ)は「当代なり」まで。

3 吉野山 以下は幽曲の例と考えられる。

4 父王の盛徳 底本「フワウノセイトク」。浄蔵は、平安時代の高僧として有名な浄蔵大徳とも考えられるが、宇治山には縁がないようである。これは『法華経』妙莊嚴王品の、浄蔵と浄眼が父の妙莊嚴王を仏道に誘い入れたことをさすのであろう。そうすれば、「フワウ」は「父王」と考えられる。

5 恋重荷 以下は恋慕の例と推定される。

6 一生は風の前の雲 何の曲か不明。「鍾馗」にこの句が見えるけれども、世阿弥作とは認めがたい曲であるから、別の曲(おそらく曲舞の謡)にあった句を「鍾馗」が引いたのであろう。『五音曲』(三三七頁)参照。

五音下

一、闌曲 これは各別の曲間なり。(論語に云はく、「中庸之

為徳也、其至矣乎」已上して、何とも語ふ性位なり。おほかたは節付けのままにて、俱行もあるべし。真実は独り音曲なり。そのゆゑは、当座の気転によりて、何とも語ふ位なり。祝・幽・恋・哀の、四音に離れて、また四音に渉る曲道あり。口伝あり。(深秘)。これ、すでに師家の位なるべし。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に鳴隠れ行く舟をしぞ思ふ

ふ 關曲の姿か。

自然居士 亡父曲。

指声へそれ一代の教法は、五時八教をけづり(「つくり」とあり、不審)教内・教外を分かれたり。只声なり、この声の位、無上の大事あり。五時と云つば、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃、四教とは、これ蔵・通・別・円たり。釈迦教主の秘蔵を受け、五(主)相成身のみね(「む」とあり)を開きし(下)よりこのかた、誰か仏法を崇敬せざらん。只詞へわれはもと隠遁國の民なり。この内に法界舎と云ふ家あり。禁戒を垣として悪しき友をば近付けず。さればかく身を捨て果てば、静かなるを友とし貧を樂とすべき。隠遁の栖・禪觀の窓こそ望む所なれども(下)、ただし山に入りても、なほ心の水の、水上は求め難う、市に交はりても、同じ流れの水ならば、真如の月などか澄まざら

あけては、きちべうにはれて(主)ういのかんかんたるを碎きて、うんてんはんをさまる。尉にこれを怪しめて、この物語の不審を少々尋ねれば、この翁、齒もなき口を広らかにうち笑みて、上へいさ延とよ、対面の初めに、伊勢(しほる)物語の奥儀(不審)とありをくれぐれと語らんは、且(しほる)は空恐ろしや。且は道の聊爾なりとて、左右なく言はざりけりとや。いざや伊勢の神垣、越えけん跡を尋ねん。

秘する所の言の葉は、秘する所の言の葉は、数々なりと申すとも、殊に憚り多きは、馴れにし人の名字なり。へそも名字のしみとは、何事を申したりけるぞ。へ数々ありしその中に、とり分き十二人なり。へ十二人も三人もわれはまつたく知らぬなり、第一番は誰やらん。へ徒なりと名にこそ立てれ桜花、へ年に(延)稀なる人も待ちけり。へこの歌の主をば、人待つ女と書きたりしを、へ紀有(延)常が娘(名論義)と頭はすは、尉が僻事。へさてその後逢坂の、関の関屋の楨柱、へ立つ名も口惜し、思ひ朽ちなると、恋死にに死せしをば、へ物病みの女(しほる)と書きたりしを、へ大納言、長谷雄の卿の娘と頭はす。尉が僻事か。へげにや住吉の、松の老木の朽ちがましや、物云ひしける翁なり、なほ(しほる)も長居せん、筋

ん。只詞へかやうに思ひしより自然心得、今は山深き栖を出で、かかる物狂ひとなり。歌へ花洛の塵に交はり、花洛の塵に交はり、脚下(しほる)の波に裳裾を濡らし、万民へよするに面を曝すも恨みならず。法懸切のためなれば身を捨つる、吹く風の、寒き山として入る月に、指を指しても(よする)留め難きは、つながぬ月日なりけりや。つながぬ月日なりけりや。

葛袴 亡父曲作書、但眼。

指声へ神勅に従ひて知頭集を開けば、何々かの内大臣経信の卿、過ぎにし九月十三日に、住吉に詣で候。(下)伊勢物語の不審を教へて賜べと志ざし給ひしに、今日は名に負ふ秋の二夜なれば、海の面漫々と明らかにして、松の風磯辺の波を語らふなれば、心空に惚れて、下歌へ四所明神を巡礼し、釣殿に出で、月を眺むる所に、ここに怪しかる老翁、忽然と出で来たり。その姿を見るに、霜雪(よする)頭に重な(つ)て、鬚髪に黒き筋なし。波浪額に畳んで、面貌しきりに皺めり。くわうきやうとまかぶらたかに、しゆるにしてみにくく、白き水干の、古く赤みはてたるに、葛の袴(名風の見聞在之世)のここかしこ破れ損じたりけるに、錆色の立烏帽子を耳の際に引き入れ、嘯き月に向へば、せいしつものゆうゆうたるを

なきことや夕暮の、月もろともに住吉の、松の葉杖に絶りて、津守の浦に帰りけり、津守の浦に帰りけり。

- 1 已上して 達人の域までのぼつてから。
- 2 独り音曲なり 『五音曲』(三三八頁) 参照。
- 3 主 おそらくは「豎」の宛て字で、豎の声(風曲集二五八頁参照)にうたう意であろう。
- 4 但眼 能勢博士は「最も肝要な眼曲」と解されたが、「眼目の部分だけを作曲・作詞した」の意であろう。
- 5 知頭集 『伊勢物語』の古注。
- 6 重な(つ)て 底本「カサナテ」。三八一頁注16参照。
- 7 くわうきやうと 以下意味不明の語が多い。
- 8 せいしつもの 以下意味不明。
- 9 尉に 底本「セウニ」。
- 10 しみ 意味不明。

野守

指声へこれに出でたる老人は、この春日野に年を経て

弱法師 節曲舞。

上序へそれ(主)仏(しほる)日西天の雲に隠れ、慈尊の出世まだ(しほる)遙か、三会の暁いまだなり。指声へしかるにこの中間において、何と心を伸ばへまし。ここによつ

て上宮太子、国家を新ため、万民教へて、仏法流布の世となして、あまねき恵みを弘め給ふ。すなはち当寺を御建立あつて、初めて僧尼の姿を顕はし、四天王寺と名付け給ふ。曲舞へ金堂の御本尊は

歌占 元雅曲。

指声へこれは伊勢の国二見の浦の巫にて候。それ歌は天地開け初まりしより

蟻通

指声へ瀟湘の夜の雨頻りに降つて、遠寺の鐘の声(横声の懸り)も聞えず

実盛

指声へ笙歌遙かに聞ゆ

高野節曲舞 元雅曲。

上序へそもそもこの高(しほる)野山と申すは、平城を去つて二百里、郷里を離れて無人声、指声へしかれば末世の隠所として、結界清浄の道場たり

当麻

上序へそもそもこの当麻の曼茶羅と申すは

熱田 龜阿曲。

上序へそもそも当社と申すは、景行第三の皇子、御名は倭建命、地神五代には

竹取歌 同曲者。

次第へあるに甲斐なき世中を、あるに甲斐なき世中を、古畑打つぞ悲しき

西行歌

指声へそれ春の花は上求本来の梢に顕はれ、秋の月は下化冥闇の水に宿れり。(下)たれか知る行く水に三伏の夏もなく、潤底の松の風、一声の秋を催ほすこと、草木国土おのづから、見仏聞法の結縁たり。下歌へ置くその品々の法の門、上歌へ開くる道は一つぞと、開くる道は一つぞと、知るや心の水清き、御法の舟なれば、行くこと易き彼の岸に、到り到りて聞からぬ、二世安樂は有難や、二世安樂は有難や。

伏見

上序へそもそも伏見の翁のこと

- 1 上序 いまクリという部分に当たる。
- 2 万民教へて 底本「バンミンヲシエテ」。現行曲では「万民」の下に各助詞の「を」がある。脱字か。
- 3 歌 前に挙げてきたのが節曲舞であるのに対し、小歌節系統の謡であることを示す。
- 4 古畑打つぞ 底本「フルハタウツス」。「ス」の右に「ソ歎」と注する。

の御既にて、御産(しほる)平安、皇子御誕生なる、既戸の皇子と申すも、上宮太子の御事。

飛火

只詞へそもそも当社と申すは、忝なくも神護景雲二年に、河内国枚岡より、この春日山本宮の峯に遷らせ給ふ。

雪山

本には指声論義あり、略す。近年は、「有難やこの君の、豊の明り」と謡ふなり、わたくしにこれを記す。

上歌へ曇りなやこの御代の、曇りなやこの御代の、豊の明りの始めより、千代木の風も収まり、雪しほる豊年に深かりき。面白(下)の雪山や、春毎に君を祝ひて若菜摘む、わが衣手に降る雪は、払はじ払はで、そのままに受くる袖の雪、運び重ね雪山を、千代に降れと作らん、雪山を千代と作らん。

李夫人 亡父曲。

指声へ忝なき御譬へなれども、いかなれば漢王は

およそ五音曲道の条々、以上。この外の音曲、於(古)体・当世、その数々、皆書不及。しかれども、他はこれに順ひて、よくよく知分可有なり。

- 1 入御 底本「充御」。「御口に飛び入り」が不吉な連想をもつので、諷いかえた文句。「傾き」を「輝き」、「破り」を「納め」と改めたのも同じ理由である。
- 2 暁月 いまの闌曲では「キヨオケ(ツ)」と発音する。(ツ)は親世流で「含」と表記する特殊な発音。
- 3 十二月 底本「十二月」。現行闌曲では「十二箇月」となっている。おそらく「月」は「つき」とよんだのであろう。
- 4 於古体・当世 古いスタイルのも現代ふうのもの。

一、音曲習道の次第々々。文字読みより節をよくよく究め尽して、さて曲を磨きて、さて謡の詰め開きを心得て、音声の性位ごとごとく成就して、さて謡ふ当座の音聞、清曲なることを可レ知。音聞清まらずは、成就不可レ有。この条々をことごとく曲得して、安全音になる位を、声懸りと云ふなり、およそ習道のほどは、節を体にして、習道終りてのちは、かかりを体にするべし。

一、昔、白鬚の曲舞を、亡父申楽に舞ひ出だしたりしより、当道の音曲ともなれり。しかれば、白鬚・由良湊・地獄、これは申楽の内ながら、押し出だしたる道の曲舞のごとくなるなり。また、海道下り・西国下り、玉林の作書として、南阿・観世亡父、曲付けせられしなり。

応安の頃より至徳年内の曲舞、以上。白鬚・由良湊・地獄、これは申楽の内なり。海道下り・西国下りは、ただ琳阿作書として、南阿・観世の曲付けなり。しかれども、曲舞の当道へは不出。これも遊楽の曲風のごとし。この外、近年、善光寺・百万の節曲舞、これらは当世の曲舞には云へども、曲舞の性位の本曲をば正に(ただし)くして、声懸りを和らぐるばかりなり。わたくしの作書なり。

六代の歌 これは、ある御方より、「本説あることを、序・破・急に書きて進上せよ」との御意を以て、記したる歌なり。

- 1 音曲習道の次第 『音曲声出口伝』(二二九頁) および「花鏡」(二二八頁) 参照。
- 2 声 底本「セウ」とも読めるが、能勢博士が「カ、リ(懸り)」とされたのに従う。
- 3 白鬚の曲舞 能「白鬚」のクセになっっている。
- 4 由良湊 観阿弥の作詞・作曲。『申楽談儀』に「名譽の曲舞」とする。

この曲舞どもも、道の曲舞よりは、和らぎたる曲分なり。道の曲舞と申すは、上道・下道・西岳・天竺・賀歌女なり。(鶴、この流を亡父は習道ありしなり)。賀歌は南都に百万と云ふ女節曲舞の末と云ふ。今は皆々曲舞の舞手(入体)絶えて、女曲舞の賀歌が末流ならでは不レ残。祇園の会の車の上の曲舞、この家なり。

白鬚曲舞 亡父曲付。闌曲なり。亡父作書。上へそれこの国の起り、家々に伝ふる所 由良湊節曲舞 同曲付。幽曲。およそ節曲舞の幽曲の

上へ「およそ(しほる)人間の八苦の中に愛別離苦 地獄節曲舞 南阿曲付。これは哀傷の声懸りなり。作書山本。百万能の内。

上へ「昨日も徒に過ぎ、今日も空しく暮れなんとす。海道下り 南阿曲付。この曲舞の幽は者は(不審)闌曲。これもまた毎々幽曲にも亘る。作書玉林。

指声へ「寿永二年の秋の頃、平家西海に赴き給ふ。城南の離宮に到り

西国下り 亡父曲付。玉林(林懸)作書。

指声へ「海道下り」を作詞し、南阿弥が作曲した。少年時代の世阿弥が將軍義満の前でこれを謡い、琳阿弥は罪を許されたという(『申楽談儀』)。「西国下り」も琳阿弥の作詞で観阿弥の作曲。

- 5 地獄 山本某作詞・南阿弥作曲。能「歌占」のクセに採りこまれていた。
- 6 押し出だしたる ちゃんとした。
- 7 道の曲舞 本来の曲舞。
- 8 玉林 琳阿弥の別称。他にもリン阿弥という者がいたので、区別するための呼びかた。琳阿弥が東国へ流されたとき「海道下り」を作詞し、南阿弥が作曲した。少年時代の世阿弥が將軍義満の前でこれを謡い、琳阿弥は罪を許されたという(『申楽談儀』)。「西国下り」も琳阿弥の作詞で観阿弥の作曲。
- 9 南阿 海老名南阿弥。遁世者で、歌・連歌・音曲などに通じ、義満にも親近していたらしい。永徳元年(一三八二)三月没。
- 10 上道 以下「賀歌」まで、曲舞の流派名、または芸人たちの名。
- 11 百万 この女性をモデルとして能「百万」が作られたのであろう。
- 12 祇園の会の車の上の曲舞 曲舞車というダシが出たのである。能「舞車」参照。
- 13 幽は者は 意味不明。そのため書写者が「不審」と注したのである。誤写であらう。
- 14 玉林 書写者の注のごとく「林」の誤写。琳阿弥のこと。

15

曲舞の当道へは不_レ出 本来の曲舞芸としては、うた
われるに至らなかつた。

16

善光寺 能「柏崎」のクセが善光寺如来の功德をたた
えた内容。昔は「土車」のクセだった由が「申楽談儀」
に見える。それが「善光寺の曲舞」であろう。

17

正にして 基本にして。

18

和らぐるばかり 小歌ふうのメロディに編曲したのみ。

夢跡一紙

晩年にいたり逆境に在った世阿弥は、七十歳のとき、長男の元雅に先立たれた。元雅は、本書のなかに「子ながらも類なき達人」「祖父にも越えたる堪能」と言われているほどで、世阿弥が信頼しきっていた後継者である。能の作者としても、また「隅田川」「歌占」「弱法師」「盛久」などの名作を残している。將軍義教が音阿弥の芸を愛顧し、世阿弥たちの座は勢いを失ってゆくなかで、元雅さえ健在ならば、いつかは再び形勢を盛り返す希望も無いではなかつたらう。ところが、その元雅が旅さきで急死したのだから、世阿弥の悲歎は絶望的なものであつた。その心境を記した追悼文が本書である。

したがって、芸論としてはほとんど見るべき点が無いので、付載の形を取った。もつとも、元雅の死が永享四年（一四三二）八月一日であること、秘伝をすべて元雅に授けてあつたことなどがわかるので、資料としては価値が無いわけではない。

吉野の奥にある天川神社には、永享二年十一月、元雅が能「唐船」を奉納したとき使った面（阿古父尉）が蔵されており、その面の裏に元雅の自筆で銘が墨書されている（八頁参照）。おそらく自座の衰運を挽回しようという願いではなかつたか。しかし、その悲願もむなしく、一年八箇月後、元雅は客死した。わたくしは、昭和三十年に天川神社を訪れ、この面を手にして、感慨無量なものがあつた。

テキストは、松廼舎文庫本のほかに無い。

夢跡一紙

「根に帰り古巢を急ぐ花鳥の同じ道にや春も行くらん」
げにや、花に愛で、鳥を羨む情、それは、心ある詠めに
やあらん。これは、親子恩愛の別れを慕ふ思ひ、遣る方
もなき余りに、心なき花鳥を羨み、色音に惑ふ哀れさも
思へば同じ道なるべし。さても、さる八月一日の日、息
男善春、勢州安濃の津にて身まかりぬ。老少不定の習
ひ、いまさら驚くには似たれども、あまりに思ひの外な
る心地して、老心身を屈し、愁涙袖を朽たす。さるにて
も、善春、子ながらも、類なき達人として、昔、亡父こ
の道の家名を受けしより、至翁、また、私なく当道を相
続して、いま七秩に至れり。善春、また祖父にも越えた
る堪能と見えし程に、「共に云ふべくして云はざるは、
人を失なふ」と云ふ本文に任せて、道の秘伝奥儀、こと
ごとく記し伝へつる数々、一炊の夢となりて、無主無益
の塵煙となさんのみなり。今は、残しても誰が為の益か
あらむ。「君ならで誰にか見せん梅の花」と詠ぜし心、
まことなるかな。しかれども、道の破滅の時節到来し、

よしなき老命残(つ)て、目前の境界に、かかる折節を見
ること、悲しむに堪へず。あはれなるかな。孔子は鯉魚
に別れて、思ひの火を胸に焼き、白居易は子を先立てて、
枕間に残る薬を恨むと云へり。善春、幻に來(つ)て、
飯の親子の別離の思ひに、枝葉の乱墨を付くこと、ま
ことに思ひの余りなるべし。

思ひきや身は埋木の残る世に盛りの花の跡を見んとは
永享四年九月 日 至翁書

- 1 根に帰り 二条為定の歌(『新千載集』卷二・一八五)。
- 2 花に愛で、鳥を羨む 風雅な景物を鑑賞する。「かく
てぞ、花を愛で鳥を羨み、霞をあはれび露をかなしむ心・
詞おほく、さまざまになりける」(『古今集』仮名序)。
- 3 心ある詠め 教養の深い享受ぶり。
- 4 これは わたくしの場合。
- 5 色音に惑ふ よい声に心を動かされる。
- 6 息男善春 長男である十郎元雅。善春はその法名。
- 7 勢州安濃の津 いまの三重県津市。
- 8 老心身を屈し 老いせずおれた心が身をも衰弱させ。

- 9 至翁 世阿弥の別号。
- 10 私なく 忠実に。
- 11 七秩 七十歳。
- 12 共に云ふべくして 底本「ともに云つくして」。「可
与言而不与言失人」(『論語』衛霊公篇)。
- 13 一炊の夢 はかない夢のような結果。邯鄲の故事を頭に
おいての句。
- 14 無主無益 持ち主が無く、したがって何の役にも立た
ない。
- 15 君ならで 「君ならで誰にか見せぬ梅の花色をも香を
も知る人ぞ知る」(『古今集』卷一、三八)。
- 16 老命残(つ)て 底本「老命のこて」。促音を表記しな
い例は、中世の文献に多い。
- 17 鯉魚 孔子の子である鯉(字は伯魚)。世阿弥は名と
字を混合したのである。
- 18 枕間に残る薬 「故衣猶架上、残薬尚頭辺」(『白氏文
集』卷十四「病中哭金鑿子」)。
- 19 來(つ)て 底本「きたて」。
- 20 枝葉の乱墨を付くる とりとめもない事を書き散らす。
形容動詞「枝葉なり」は、詰まらない・どうしようもな
い等の意。「盗みも命ありてこそ、あら枝葉や引かんと
て」(能「熊坂」)。

金島書

元雅に先立たれたことだけでも「道の破滅」という危機に直面していた世阿弥は、その二年後、七十二歳の老齢で佐渡へ流されることになった。その理由は不明であるが、野々村戒三氏は、世阿弥父子が南朝方に関係のある者として、室町幕府から睨まれた結果ではないかと推測された。元雅の座が本拠地とした越智は、吉野のすぐ近くで、南朝方の拠点であり、また永享年間には、楠木光正・北畠教具・越智維通などが北朝方と事を起している。野々村説は、かなり事実に近いのではなからうか。

佐渡で二年ほどを過ごした世阿弥は、永享八年（一四三六）二月、奈良の興福寺で同じころ行なわれる新能を思い、ひとつの小謡を作った（三八九頁下段第三行以下）。それに、かねて作ってあった七篇の小謡を添え、ひとまとめにしたのが本書である。

七篇の小謡は、世阿弥が永享六年（一四三四）五月四日に都を出てから、若狭の小浜を経て佐渡にわたる、新保という所にいることになったが、争乱が起ったので、泉に居を移した等の事跡を題材としている。悲惨な境遇であるにも拘わらず、詞章にはあまり沈鬱さが感じられない。おそらくは、身の上を悲歎するよりも、法楽の意味で小謡を作り、その功德により都へ召し還されることをひそかに祈ったものではあるまいか。

これも、芸論ではないので、付載の扱いにしたが、世阿弥の伝記資料としては、ある程度まで有用である。テクストは、松廼舎本のほかには無い。「世阿弥十六部集」では「金島集」と改題されているが、これは吉田東伍博士の私意で、底本の内題どおり「金島書」とすべきであろう。

金島書

若州

永享六年五月四日都を出て、次の日若州小浜と云ふ泊に着きぬ。ここは先年も見たりし所なれども、今は老耄なれば定かならず。見れば江廻り廻りて、磯の山・浪の雲と連なつて、伝へ聞く唐土の遠浦の帰帆とやらんもかくこそ思ひ出でられて。謡ふへ船泊むる、津田の入海見渡せば、津田の入海見渡せば、五月も早く橋の、昔こそ、身の若狭路と見えしものを、今は老の後瀬山、されども松は緑にて、木深き梢は気色だつ、青葉の山の夏蔭の、海の匂ひに映るひて、差すや潮も青浪の、さも底なき水際かな、さも底なき水際かな。青苔衣を帯びて巖の肩に懸り、白雲帯に似て山の腰を廻ると、白楽天が詠めける、東の船西の舫、出で入る月に影深き、潯陽の江の辺、かくやと思ひ知られたり。

- 1 永享六年 世阿弥七十二歳。
- 2 若州小浜 若狭国遠敷郡小浜（福井県小浜市）。室町期には港として著名であった。
- 3 先年も見たりし 壮年期に地方興行などで訪れたのであろう。
- 4 遠浦の帰帆 瀨湘八景のひとつ。
- 5 かくこそ 下に「と」が脱字か。
- 6 津田の入海 いま向島という。小浜市の東部。世阿弥の時代はまだ入江だったようである。
- 7 橋の 「さ月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集）卷三・一二九。
- 8 後瀬山 小浜市の南にある。「かにかくに人は言ふとも若狭路の後瀬の山の後も逢はむ君」（万葉集）卷四・七七七。
- 9 青苔衣を帯びて 都在中の詩句。「白雲似帯閉山腰、青苔如衣負巖背」（江談抄）卷四。「背」はテクストにより「肩」ともなっている。「青苔」以下はサシで謡われたと考えられる。したがって「船泊むる」から「水際かな」までが上歌。
- 10 白楽天が 能「白楽天」で、ワキ（白楽天）に「いでさらば、目前の景色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を帯びて巖の肩に懸り、白雲帯に似て山の腰をめぐると言わせているので、白楽天の作とする俗説があつたのかも

時鳥

只詞へさて西の方を見れば、入海の浪白砂雪を覆ひて、皆白妙に見えたる中に、松林一むら見えて、まことに春六月の景色なるべし。この内に小堂まします。八幡宮勸請の靈祠なり。されば所をも八幡と申す。敬神のため参詣せしに、ここに不思議なることあり。都にては待ち聞きし時鳥、この国にては山路は申すに及ばず、かりそめの宿の梢幹の松が枝までも、耳喧しきほどなるが、この社にてはさらに鳴くことなし。これはいかにと尋ねしに、宮人申すやう、これはいにしへ為兼の卿の御配所なり。あるとき時鳥の鳴くを聞き給ひて、鳴けば聞く、聞けば都の恋しきに、この里過ぎよ山時鳥と詠ませ給ひしより、音を停めてさらに鳴くことなしと申す。げにや花に啼く鶯水に棲む蛙まで、歌を詠むことまことなれば、時鳥も同じ鳥類にて、などか心のなかるべきと覚えたり。上謡へ落花清く降りて郭公初めて鳴き、明月秋を送りては松下に雪を見ると、古き詩にも見えたれば、折を得たりや時の鳥、都鳥にも聞くなれば、声も懐し時鳥、ただ鳴けや鳴け老の身、われにも故郷を泣くものを、われ

にも故郷を泣くものを。

- 1 松林 底本「せうりん」。
- 2 春六月 「六」は「二」または「正」の誤写であろう。
- 3 小堂 底本「しやうどう」。
- 4 八幡宮勸請 底本「八まんくうくわんしや」。下に「う」脱か。
- 5 幹 「軒」の誤写か。
- 6 為兼の卿 京極為兼。『玉葉集』の撰者。永仁六年（二二九八）三月十六日、佐渡に流された。在島五年で召し還されたが、正和五年（三二二六）二月、こんどは土佐に流された。元弘二年（三三三三）三月二十一日、七十九歳没。
- 7 鳴けば聞く 『世阿弥二十三部集』の頭注に「為兼の家集に見えてゐる」とあるが、実際には無い。世阿弥の現地での伝聞か。
- 8 花に啼く鶯 『古今集』仮名序。
- 9 落花清く降りて 出典不明。

泉

只詞へまた西の山もとを見れば、人家堂を並べ都と見えたり。泉と申す所なり。これはいにしへ順徳院の御

配所なり。しかれば御製にも、限りあれば萱が軒端の月も見つ、知らぬは人の行末の空。げにや十善万乗の御聖体、さしも余薫の御蔭とて、その名も高き山桜、梢の花と栄えん、雲居の春の長閑さも、今さもして天離る、鄙の長路の御住居、思ひやられて傷はしや。所は萱が軒端の草、忍ぶの簾絶々なり。下謡へ夕立落つる庭潦、これもや泉なるらん。上へ下ぐる、水に秋こそ通ふらし、水に秋こそ通ふらし、掬ぶ泉の、手さへ涼しき折々に、御衣の袂や濡れけん。げにや人ならぬ、岩木もさらに悲しきは、美豆の小島の、秋の夕暮と、詠めさせ給ひしも、御身の上となりけり。下へ櫛摘む、山路の梅雨に濡れにけり、暁起きの墨染め、袖も同じ苔筵の、誰ぞ錦の御褥ならん、傷はしや。上へ新こる、遠山人は帰るなり。里まで送れ、秋の三日月も、雲の端に、光の影の浮世をは、君とても逃れ給はめや。さてこそ云ふならく、奈落の底に入りぬれば、刹利も首陀も、変らざりけるとなり。げにや蓮葉の、濁りにしまの心もて、泉の水も君住まば、涼しき道となりぬべし、涼しき道となりぬべし。

- 3 下ぐる 「下ぐる水に秋こそ通ふらし掬ぶ泉の手さへ涼しき」『新千載集』卷三・三〇二。作者は中務人ならぬ。「人ならぬ若木もさらに悲しきは美豆の小島の秋の夕暮」『純古今集』卷十七・二五八。作者は順徳院。
- 5 櫛摘む 「櫛摘む山路の露にぬれにけり暁起きの墨染めの袖」『新古今集』卷十七・二六四。作者は小侍従。墨染め 『世阿弥二十三部集』は「墨染の」と翻字するが、底本には「の」が無い。
- 7 新こる 「爪木こる遠山人は帰るなり里まで送れ秋の三日月」『玉葉集』卷五・六三三。作者は順徳院。
- 8 さてこそ 底本「さて事」。もと「さてこそ」とあった「そ」を「と」に写し誤り、さらに「事」と宛てたのであろう。
- 9 云ふならく 「イフナラクナラクノ底ニ入りヌレバ刹利モ首陀モカハラザリケリ」『沙石集』卷八「死道不知人事」。高岳親王の詠とする。
- 10 蓮葉の 「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を珠とあざむく」『古今集』卷三・一六五。
- 11 しま 「染ま」と「鳥」の掛詞。

- 1 十善万乗 底本「十せんはんせう」。
- 2 さもして 誤脱と思われる。意味不明。

十社

只詞へかくて国に戦起りて國中穩かならず、配所も合戦の巷になりしかば、在所を變へて今の泉と云ふ所に宿す。さる程に秋去り冬暮れて、永享七年の春にもなりぬ。ここは当国十社の神まします。敬神のために一曲を法樂す。指事へそれ人は天下の神物たり。宜禰が習はしによりて威光を増し、五衰の眠りを無上正覚の月に醒まし、衆生等も息災延命と、護らせ給ふ御誓ひ、げに有難き御蔭かな。神のまにまに詣で来て、歩みを運ぶ宮めぐり。げにや和光同塵は、げにや和光同塵は、結縁の御初め、八相成道は、利物の終りなるべしや。まこと秋津洲の中こそ、御代の光や玉垣の、国豊かにて、久年を楽しむ、民の時代とて、げに九の春久に、十の社は曇りなや、十の社は曇りなや。

- 1 今の 上述の。
- 2 十社の神 不明。「延喜式」神名帳に出る佐渡国九社と金北山大権現(佐渡総鎮守社)をさすかと言われる。
- 3 法樂 神仏に詩歌や芸能を奉納すること。

給ひしより、後代に名付けし国とかや。しばらくこれを惟れば、その品々も一ならぬ、八島の浪の寄々に、粗粗語り申すべし。曲舞へその初めを惟れば、天祖の御譲り、天の浮橋より、光さし下す、矛まの国の、淡路を初めとして、あれは南海、これは北海の佐渡の島、胎金両部を具へて、南北に浮かむ。海上の四涯を護る、七葉の黄金の蓮の上よりも、浮み出で立つ国として、神の父母とも、この両島の島のあるなるを、その名を問へば、佐渡と云ふなり。この御神詠もあらたにて、妙なる国の名も久し。上誦ふへ然れば伊弉諾・伊弉册の、その神の代の今殊に、御影を分けて伊弉諾は、熊野の権現と現はれ、南山の雲に種蒔きて、国家を治め給へば、伊弉册は、白山権現と示現し、北海に種を収めつつ、菩提涅槃の月影、この佐渡の国や北山、毎月毎日の影向も、今に絶えせねば、国土豊かに民厚き、雲の白山も伊弉册も、治まる佐渡の海とかや。下へそもそもかかる靈国、かりそめながら身を置くも、何時の他生の縁ならん。憂しや代雲水の、住むに任せてそのままに、衆生諸仏も相犯さず。山は自ら高く、海は自ら深し。語り尽す山雲海月の心、あら面白や佐渡の海、満目青山なほ自ら、その名を問へば、佐渡と

北山

- 4 神物たり 靈妙な生物だ。
 - 5 五衰 天人が寿命の尽きる時に現われる五種の徴候。
 - 6 護らせ給ふ 以下「宮めぐり」まで下歌か。
 - 7 げにや 以下、終りまでが上歌か。
 - 8 和光同塵 仏・菩薩がしたしみやすい在りかたで俗人たちに近づくこと。「和光同塵結縁之初、八相成道以論其終」(摩訶止観 卷六下)。
 - 9 八相成道 釈尊が人として生存されたプロセスを八種に分け、八相という。その第六である成道すなわち悟りを開くことがもつとも重要と認め、八相のことを八相成道ともいう。
 - 10 まこと 底本「まこと」。「ち」は「古」の草体を誤写したものである。
- 指事へかくて古き人に逢ひて、当国の神秘結界尋ねおくりなり。上誦ふへそもそも我が朝秋津洲と申すは、粟散辺土の小国なりと申せども、天地開闢の国にして、天照大神の御末、正しく日統を戴くこと今に絶えせず。指事へしかれば国の名を問へば、神道において様々なり。まづ大日本国とは、青海原の海底に、大日の金文現はれ

云ふ、黄金の島ぞ妙なる。

それ治まれる代の声は、安んじて以て楽しみり。これ誠にその政事やげばなり。天地を動かし、鬼神を感ぜしむ。二月の初申なれや春日山、峯響むまで、いただき奉ると詠ぜしは、げにも故ある道とかや。又二月や、雪間を分けし春日野の、置く霜月も神祭りの、今に絶えせぬは、国安楽の神慮なり。しかれば小忌衣、二月第二の日の宮寺に参勤し、□の歌を誦ふも、さぞ御納受はあるらん。上へしかれば興福寺の、西金・東金の、両堂の法事にも、まづ遊樂の舞歌を整へ、万歳を祈り奉り、国富民も豊かなる、春を迎へて年を積む、薪の神事これなりや。それは北野の天神も、名は大唐に留まり、会は興福に納まるとの、御願文もあらたにて、十二大会の初めにも、この遊樂をなすことの、当代の今に至るまで、目前あらたなる、神道の末ぞ久しき。

これを見ん残す黄金の島千鳥跡も朽ちせぬ世々のしるしに

永享八年二月 日

沙弥善芳

- 1 おくりなり 「おくなり」もしくは「おくるなり」の誤写か。
- 2 上謡ふ 底本「上う」。「上謡ふ」の略表記と認め、そのように直した。いまの謡でいうクリに当たる。
- 3 大日本国 底本「大日本こくに」。「に」は削るべきであらう。
- 4 青海原の海底に 「昔此国未ダナカリケリ時、大海ノ底ニ大日ノ印文アリケリニヨリ、太神宮御銚指下テサグリ給ケル」〔沙石集〕第一「太神宮御事」。
- 5 大日 大日如来、すなわち毘盧遮那仏である。
- 6 胎金両部 胎藏界と金剛界。世阿弥時代の神道では、密教の理論に当てはめる説がもっぱら行なわれた。
- 7 北野 北野天神、すなわち菅原道真。
- 8 上謡ふ 底本「上う」。この所は、いまの謡でいうアゲハ。
- 9 種蒔きて 「ツレ然れば開けし天地の、伊弉諾と書いては、シテ種蒔くとよみ、ツレ伊弉冊と書いては、シテ種を収む、ツレこれ目前の御誓ひなり」〔能「淡路」〕。
- 10 雲の 「雪の」か。
- 11 語り尽す 底本「か、りつくす」。「九位」(二九〇頁)参照。
- 12 それ治まれる代の声 以下は「北山」と別の小謡。『五音曲』(三三九頁)参照。
- 13 二月の 「春日祭、きさらぎの初申なれや春日山峯とよむまでいただきまつる」〔散木奇歌集〕卷六・神祇。
- 14 二月や 「二月や雪まを分けし春日野におく霜月も神まつるなり」〔新葉集〕卷九・五九四。
- 15 分けし 底本「にけし」。
- 16 小忌衣 「きさらぎ」の枕詞。
- 17 □の歌を 底本「の」の上は欠字。吉田東伍博士は「翁」かと推測された。二月二日には興福寺の西金堂で、三日は東金堂で、修二月会が行なわれ、その際、薪申樂が奉納される。興福寺に属する申樂の座は、義務として参勤し、式三番を演ずる。したがって、吉田博士の「翁」という説は至当であらう。
- 18 名は大唐に 中国まで著名だという意。「北野天神の御詩にも、名聞三國、会留興福、朝之為朝、蓋是会力と作らせ給ひけるとなり」〔公事根源〕十一月興福寺維摩会。
- 19 十二大会 興福寺および春日神社の主要な法事十二。実は、修二月会はこの中に入っていないが、世阿弥の思い違いであらうか。
- 20 黄金の鳥 佐渡の別名。『金鳥書』という書名のもとづくところ。
- 21 善芳 世阿弥の法名。

書簡

昭和十七年、川瀬一馬博士によって、宝山寺の書庫から発見され、翌年『世阿弥自筆伝書集』に翻印された。宝山寺蔵の金春氏綱(安永七年七十二歳没)の書留によると、金春家伝来の世阿弥の書簡は三通あったはずだが、現在は二通しかない。どちらも女婿だった金春禅竹宛である。

第一の書簡は、応永末年ごろのものらしい。仮に応永三十五年(一四二八)を取れば、禅竹は二十四歳である。『却来花』(永享五年作)に禅竹のことを「芸風の性位も正しく、道を守るべき人なれども、いまだ向上の大祖とは見えず」と評しており(禅竹二十九歳)、応永末年ごろではいっそうその感が強かったろう。本書簡で、芸の成長をほめながらも、二曲三体のマスターを要望しているのは、そういった状況に合う。内容は、禅竹が何か伝授を依頼してきたのに対し、いちおう承諾の可能性を示しながらも、なお禅竹の芸がどこまで上達しているか、実地にテストしたうえでなければ確言はいたしかねるといった趣のようである。応永三十五年の閏三月九日には『六義』を、その六月一日には『拾玉得花』を禅竹に相伝しているの、あるいはそれに関係があるのかもしれない。第二の書簡は、佐渡からのもので、禅竹との間がらを知る好資料である。世阿弥が流されているうち、その妻を禅竹が世話していたことは、本書簡によりはじめて知られた事実である。

書簡に限り、校訂にあたって、できるかぎり原本の姿を残すことに意を用いたので、表記上いくらか不統一な点が存する。原則的には原本どおり翻印し、漢字をあてたものについては、右に原形を示した。また、仮名づかいの訂正および送り仮名・傍訓を付した場合には、() を付して区別した。

一 禅竹苑返報

春御方へまいる

申させ給へ

きやより

世阿

おろかなる心よと見る心より
外にはなにの玉を見ましや

御状詳しく拝見仕候。北国へ御下向の由、承け給候。めでたく候。さりながら、遠く御下り候へば、身のため便りなくこそ候へ。兼又、能の事、承け給候。先日申候(ひ)しごとく、為手御持ち候事は、はや、夙くより印可申て候。是より上は御心にて候べく候。三村殿、近江にての御能を一見申されて候。能が大に御なり候由、申され候。目利きにていられ候間、疑いあるまじく候間、御心安く候。さりながら、千間も一見には如か

ず候間、御能を見申候て、落居をば申候べく候。はや御能に安堵の分は、印可申候也。仏法にも、終始の参学と申は、得法以後の参学とこそ、補嚴寺二代は仰せ候(ひ)しか。さる程に、御能は、はや得法の見所は疑いなく候。手の事は、ただ大に、たぶくと、二曲三体の見聞を御心に候べく候。なをく、いかにもく、得法の後を、練り返しく、劫を積ませ給候べく候。返々、終始の参学を、御心に油断なく持たせ給候べく候。万事、御能を見申候て、申べく候。丹波にての御能よりは、大に御なり候由、御心にも覚えさせ給て候由、承け給候(ひ)つる。又、三村殿も一見申されて候。又、さる人の、河内にての勸進を見物申されて候も、褒美申され候。いかさまく疑ひなく、御能は大になりたるかと覚え候。得法の事は、もとよりの御事にて候間、かれこれ成就かと覚えて候。さりながら、千間も一見には如かず候べく候。御能を見申候て、治定の御返事申候べく候。

恐々謹言

世阿(花押)

五月十四日
金春大夫殿御返報

- 1 春御方 「金春様」の雅称。以下「きやより世阿」まで、上包みの紙に記されたもの。
- 2 きや 「世阿弥自筆伝書集」には「きよつ」と翻字されているが、原本は「きや」である。京都の木屋町か。
- 3 身のため わたくしにとつては。
- 4 便りなくこそ候へ 心細いことでもいざいます。「こそ」は「世阿弥自筆伝書集」に「存」と翻字するが、誤り。
- 5 能の事 禅竹から演能の件で世阿弥に諒解を得たいと申し入れたのではないかと思われる。
- 6 為手御持ち候事 この「して」は現行の能でいうシテのことであろう。内容はよくわからないが、観世座で興業権をもつ何曲かの能に対し、禅竹の上演を認可したものであろうか。
- 7 是より上は御心にて 以後は御随意で。
- 8 三村殿 何人か不明。
- 9 御能 禅竹の演能。
- 10 落居をば申候べく候 決着のところを申しあげたく存じます。
- 11 安堵の分 合格を確認した分の曲。
- 12 終始の参学 最初から最後まで学修に努めること。
- 13 得法以後の参学 悟りを開いた後の学修。禅宗では「悟後の修行」とも言い、重視される。
- 14 補嚴寺二代 原本「ふかん寺二代」。『世阿弥自筆伝書

- 15 得法の見所は 禅でいえば得法にも当たるような辺まで芸を究めていられることが、批判的に観察したところでも。
- 16 手の事 『世阿弥自筆伝書集』は「手」を「年」と翻字するが、誤り。
- 17 二曲三体の見聞 歌・舞と老体・女体・軍体の芸。「見聞」は能の技芸を具体的に言ったもの。二曲のうち「歌」が「聞」に、「舞」が「見」に当たる。禅竹の芸を「得法」など持ち上げながら、他方では二曲三体の芸をのびのびと演じなさいと勸告している点から考えると、この当時の禅竹は、九位の広精風くらいであったろうか。
- 18 御心に候べく候 念頭に置かれるのがようございます。
- 19 得法の後 ある芸境を自分のものにした後の修行。
- 20 万事 詳しい事はすべて。
- 21 勸進 勸進能。社寺の修造といったような特定目的

- 13 砕動 砕動風鬼。「人形」(二六一頁) 参照。下の「力
- 12 鬼の能ノ事 『能作書』(二八〇頁) 参照。
- 11 状に 手紙のなかで(質問された)。
- 10 罷り上りテ候ワバ 上京するような事にでもなりましたら。『世阿弥自筆伝書集』は「て」を「申」と翻字するが、疑問。原本の字形は「て」とよまれる。
- 9 不思議ニモ 万が一にも。

- 8 料足 銭の異称。おあし。「供具ノ料足一万疋副ヘテ送ラレテ候ヒシカ」(『太平記』卷三十六「相模守子息元服事」)。
- 7 實是非なく候 まことに致しかたございませぬ。佐渡の人たちは、世阿弥およびその妻に対し禅竹の経済的援助があることを知ったので、世阿弥としても、ある程度の志を土地の人たちに示さなくてはならず、前に送ってもらった分が、実際には、ほとんど残らなかった——といったような事情が想像される。
- 6 寿椿 世阿弥の妻の法名(三九三頁注14参照)。
- 5 御扶持申バカリナク候 御援助をしていただき、お礼を申し上げようありません。
- 4 カタク どちらにも。
- 3 旅ト申 都を離れている自分の事と言ひ。
- 2 留守ト申 そちらで留守をしている者の事と言ひ。後に出てくる寿椿をさす。

- 21 金春大夫殿 紙を巻いた上に書いた宛名である。
- 20 金紙 「こんし」とよませるつもりであろう。経文を写すには紺紙金泥が最上のものである。金泥の連想で「紺紙」を「金紙」と書いてしまったものらしい。
- 19 聊爾 失礼。
- 18 不思議ノゐ中 とんでもない田舎。「ゐ中」は田舎の意の慣用的な宛て字。
- 17 御心タルベク候 留意していただきたく存じます。
- 16 身ガ わたくしが。
- 15 音声ノ勢マデニテ 謡で鬼らしさを示す程度で。
- 14 親ニテ候シモノ 観阿弥。
- 13 音声ノ勢マデニテ 謡で鬼らしさを示す程度で。
- 12 身ガ わたくしが。
- 11 御心タルベク候 留意していただきたく存じます。
- 10 不思議ノゐ中 とんでもない田舎。「ゐ中」は田舎の意の慣用的な宛て字。
- 9 聊爾 失礼。
- 8 金紙 「こんし」とよませるつもりであろう。経文を写すには紺紙金泥が最上のものである。金泥の連想で「紺紙」を「金紙」と書いてしまったものらしい。
- 7 金春大夫殿 紙を巻いた上に書いた宛名である。

二 佐渡より禅竹宛返報

- 24 治定の 決定的な。さきに「落居」とあつたのに近い意味。
- 23 いかさま 確かに。
- 22 褒美申され候 ほめていられました。

ナヲく、留守ト申、旅ト申、
カタく、御扶持申バカリナク候。

御文詳シク拜見申候。兼又、此間、寿椿ヲ御扶持候ツル事ヲコソ申テ候ヘバ、コレマデノ御心ザシ、当国ノ人目、實是非なく候。御料足十貫文、受ケ取り申候。又、不思議ニモ罷り上りテ候ワバ、御目ニ懸り、詳シク申承候べく候。又、状に鬼の能ノ事、承ケ給候。是ハ此方ノ流ニワ知ラヌ事ニテ候。仮令、三体ノ外ハ、砕動マデノ分ニテ候。力動ナンドワ、他流ノ事ニテ候。タゞ、親ニテ候シモノ、時々鬼ヲシ候シニ、音声ノ勢マデニテ候シ間、ソレヲ、我等モ学ブニテ候。

ソレモ、身ガ出家ノ後ニコソ、仕テ候ヘ。返々モ、コノ能ノ道修マリ候テ、老後ニ、年来ノ劫ヲ以テ、鬼ヲセサセ給候ワン事、御心タルベク候。又、コノ程申候ツル事共、大概記シテ参ラセ候。ヨクく御覧候べく候。不思議ノゐ中ニテ候間、料紙ナンドダニモ候ワデ、聊爾ナルヤウニカ、覚シメサレ候ラン。サリナガラ、道ノ心ハ、妙法諸経ノ御法ヲダニ、藁筆ニテモ書クト申候ヘバ、道ノ妙文ワ、金紙ト思シ召サレ候べく候。ナヲく、法ヲヨクく守七給べく候也。

恐々謹言

至 翁(花押)

六月八日
金春大夫殿

参

金春大夫殿

まいる

世 阿

1 ナヲく、 付け加えますが。この条は、本文が終わったあと、書き加えられた文句である。

西暦	年号	年齢	世阿弥関係事項	能関係事項	一般事項
一三三三	(正慶二)		結崎清次(観阿弥)生まる。幼名は観世丸		北条高時死(五月二十一日)
一三四九	(貞和五)		(清次十七歳)		『連理秘抄』(二条良基)成る
一三五八	(延文三)				足利尊氏没(四月三十日)
一三六三	(貞治二)	1	世阿弥生まる(不知記)。幼名は鬼夜叉。観阿弥は三十一歳	春日若宮にて巫女の申楽能あり(二月十日)	二条良基、関白となる(六月二十七日)
一三六八	(応安元)	6	応安五年または六年ころ、観阿弥、醍醐寺において七日間演能。鬼夜叉もこれに加わる(隆源僧正日記・応永三十一年四月二十日)		足利義満、将軍となる(十二月三十日)
一三七一	(〃基)	?			
一三七三	(〃六)	11	観阿弥(四十二歳)、京都今熊野にて演能。鬼夜叉もこれに加わる。将軍義満、この能を見て、観阿弥父子の芸を認める。		
一三七四	(〃七)	12	十一月、鬼夜叉、春日若宮祭の田楽能において観阿弥の芸に接す		佐々木道誉没(八月二十七日)
一三七五	(永和元)	13	鬼夜叉、尊勝院経弁に伴われて二条良基邸に参上。良基、その芸に魅せられる。藤若の名を授与(彰考館本二条殿消息)		

世阿弥関係略年表

() 印は北朝年号

一四〇三	応永一〇	41	四月二十九日、元清、醍醐三宝院にて演能。義満臨席(田中本迎陽記)	四月二十九日、元清、醍醐三宝院にて演能。義満臨席(田中本迎陽記)
一四〇五	〃 一二	43	五月六日、醍醐にて申楽あり、義満臨席。元清演能か	五月六日、醍醐にて申楽あり、義満臨席。元清演能か
一四〇六	〃 一三	44	この頃『風姿花伝』第六篇・第七篇成るか	この頃『風姿花伝』第六篇・第七篇成るか
一四〇八	〃 一五	46	三月、後小松天皇、義満の北山別邸に行幸	三月、後小松天皇、義満の北山別邸に行幸
一四二二	〃 一九	50	十一月、世阿弥、神託により、伏見稲荷社において十番能を演ず(申楽談儀)	十一月、世阿弥、神託により、伏見稲荷社において十番能を演ず(申楽談儀)
一四二三	〃 二〇	51	閏七月、能本『難波』を手写(自筆本現存)	閏七月、能本『難波』を手写(自筆本現存)
一四二四	〃 二二	52	醍醐で世阿弥の弟四郎が演能	醍醐で世阿弥の弟四郎が演能
一四二五	〃 二二	53	この年以前に『花習』成る。『花習』のうち「能序破急事」を抜き書きす(二月十七日)	この年以前に『花習』成る。『花習』のうち「能序破急事」を抜き書きす(二月十七日)
一四二七	〃 二四	55	『風姿花伝』第七篇を元次(元雅の初名か)に相伝(六月一日)	『風姿花伝』第七篇を元次(元雅の初名か)に相伝(六月一日)
一四一八	〃 二五	56	『音曲声出口伝』成る(六月)。(同書をこの年八月、禅竹に相伝との説(川瀬一馬博士)あれど、疑問)	『音曲声出口伝』成る(六月)。(同書をこの年八月、禅竹に相伝との説(川瀬一馬博士)あれど、疑問)
一四一九	〃 二六	57	『至花道』成る(六月)	『至花道』成る(六月)
一四二〇	〃 二七	58		

一三七八	(永和四)	16	六月七日、藤若、將軍義満と同席して祇園会を見物。義満の藤若寵愛、識者に非難さる(後愚昧記)	六月七日、藤若、將軍義満と同席して祇園会を見物。義満の藤若寵愛、識者に非難さる(後愚昧記)
一三八一	(永徳元)	19	藤若、この年までに元服、観世三郎元清と名のる	藤若、この年までに元服、観世三郎元清と名のる
一三八四	(至徳元)	22	五月十九日、観阿弥(五十二歳)、駿河にて没する(常楽記)。元清、観世座の大夫となる	五月十九日、観阿弥(五十二歳)、駿河にて没する(常楽記)。元清、観世座の大夫となる
一三八六	(〃 三)	24	三月十四日、義満、春日社参詣。その時、元清一乗院にて演能(春日御詣記・兼官卿記)	三月十四日、義満、春日社参詣。その時、元清一乗院にて演能(春日御詣記・兼官卿記)
一三八八	(嘉慶二)	26	奈良一乗院にて、申楽あり(九月十九日)	奈良一乗院にて、申楽あり(九月十九日)
一三九三	明德四	31	観世元重(音阿弥)生まる	観世元重(音阿弥)生まる
一三九四	(応永五)	32	義満、將軍職を義持に譲る(十二月十七日)	義満、將軍職を義持に譲る(十二月十七日)
一三九五	応永二	33	義満出家(六月二十日)	義満出家(六月二十日)
一三九八	〃 五	36	義満邸にて申楽あり(五月二十九日)	義満邸にて申楽あり(五月二十九日)
一三九九	〃 六	37	義満、室町新邸に移る(三月十日)	義満、室町新邸に移る(三月十日)
一四〇〇	〃 七	38	海老名の南阿弥没(三月)補嚴寺建立	海老名の南阿弥没(三月)補嚴寺建立
一四〇二	〃 九	40	二条良基没(六月十三日)竹窓智藏、補嚴寺の住職(二代)となる	二条良基没(六月十三日)竹窓智藏、補嚴寺の住職(二代)となる

一四三〇	永享二	68	『習道書』成る(三月) 義教の命により、元雅、醍醐寺清滝宮の楽頭を罷免さる。後任は元重(四月十七日) 元能『申楽談儀』を編し、出家(十一月十一日)。 元雅、天川神社にて能を演じ、使用面を奉納(十一月) 正月二十四日、將軍邸において世阿弥・元雅、演能	奈良一乘院にて、宝生座演能(二月七日)	
一四三二	〃	70	元雅、伊勢の安濃津にて急死す(八月一日)	元重(三十六歳)、観世座の大夫となり、糺河原にて勸進能を興行(四月二十一日より三日間)	
一四三三	〃	71	『夢跡一紙』成る(九月) 『却来花』成る(三月)	元重、室町殿で演能。唐人見物(七月十六日) 室町殿にて元重演能(正月二十八日)	
一四三四	〃	72	世阿弥、佐渡へ流さる(五月) 妻の寿椿は都に残り、氏信に扶養さる	御会所にて元重演能(正月十四日)	
一四三六	〃	74	『金島書』成る(二月)		
一四三七	〃	75	八月、貫氏(禪竹か)『花鏡』を書写(宝山寺に現存)		
一四四一	嘉吉元	79	六月、氏信『人形』を書写(金春宗家に現存)		義教死(六月二十四日)。 当日、申楽あり。元重所演か
一四四三	〃	81	この年あたりの八月八日、世阿弥没(観世小次郎画像賛)		

一四二二	応永二八	60	『人形』成る(七月) 世阿弥、この年の四月十八日以前に出家(満濟准后日記)。法名至翁善芳。元雅、観世座の大夫となる	醍醐寺清滝宮にて、観世五郎・観世三郎(元重)演能(四月十八日)	
一四二三	〃三〇	61	『能作書』を次子元能に相伝(二月六日) 八月十二日、能本『盛久』を手写(自筆本現存)	金春氏清、京都八条坊門にて勸進申楽を興行(三月六日・七日・十日)	竹窓智嚴没(八月九日)
一四二四	〃三一	62	正月十八日、能本『タタツノサエモン』手写(自筆本現存)		
一四二六	〃三三	64	元雅、醍醐寺清滝宮の楽頭となる(四月十七日)。 『花鏡』成る(六月一日)		
一四二七	〃三四	65	九月二十日、能本『江口』を手写(自筆本現存) 十一月七日、能本『雲林院』を手写(自筆本現存)	元重、一言観音堂勸進申楽を興行(四月二十三日)。 後援は義円(後の將軍義教)	
一四二八	〃三五	66	二月、能本『布留』を手写(自筆本現存) 『六義』を金春氏信(二十四歳)に相伝(閏三月九日)	元雅、醍醐にて演能(四月十八日・五月二十一日)	義持没(正月十八日)
一四二九	正長二 〔永享元〕	67	『拾玉得花』を氏信に相伝(六月一日) 二月十六日、能本『弱法師』手写(臨写本現存)。 義教、世阿弥父子の仙洞御所における演能を禁止(五月十三日)	結崎(観世)座と円満井(金春)座と立合能(三月)。 元雅、醍醐にて演能(四月十八日)。 元雅・元重、多武峯様申楽(五月三日)	義教、將軍となる(三月十五日)

参考文献

〈原典および注釈〉

- 1 吉田東伍校 〔能楽 世阿弥十六部集〕 能楽会 明42・2、
〔再刊〕 磯部中陽堂 大7・1
 - 2 川瀬一馬校 〔世阿弥自筆伝書集〕 わんや書店 昭18・7
 - 3 川瀬一馬編 〔世阿弥二十三部集〕 能楽社 昭20・3
 - 4 野上豊一郎・西尾実校 〔風姿花伝〕 岩波文庫 昭33・10
 - 5 表章校注 〔申楽談儀〕 岩波文庫 昭35・4
 - 6 西尾実校 〔能楽論集〕 (日本古典文学大系65) 岩波書店 36・9
 - 7 吉田東伍校 〔能楽 禪竹集〕 能楽会 大4・3
 - 8 野々村戒三編 〔金春十七部集〕 春陽堂 昭7・5
 - 9 表章・伊藤正義校注 〔金春古伝書集成〕 わんや書店 昭44・5
- 世阿弥能楽論のテキストをすべて網羅した本は、残念ながら、いまのところ無い。3がいちばん多くを収めるけれども、当時はまだ「拾玉得花」が発見されておらず、また誤校が少なくない。テキストとして信頼度の高いものは6であるが、収めるところは八部である。それに反し、禪竹関係は9が完璧なもので、これに匹敵する世阿弥全著作集の刊行が待望される。
- 10 〔シンポジウム〕「世阿弥能楽論研究」〔文学〕連載 岩波書店 昭11・3以降

- 11 能勢朝次著 〔世阿弥十六部集評釈〕 上下 岩波書店 上巻 昭15・8 (昭24・8増補) 下巻昭19・8
 - 12 野上豊一郎著 〔花伝書研究〕 小山書店 昭23・7
 - 13 市村宏著 〔風姿花伝全釈〕 東宝書房 昭33・4
 - 14 金井清光著 〔花伝書新解〕 明治書院 昭33・5
 - 15 小西甚一 〔世阿弥十六部集〕 (現代語訳日本古典文学大系集21) 河出書房 昭29・11
 - 16 山崎正和編 〔世阿弥〕 (日本の名著10) 中央公論社 昭44・10
- 注釈としては11が代表的な名著である。その後、新しい資料が多く現われているので、本文においても解釈においても修正を要する所が少なくないにも拘わらず、全体としては11の右に出るものはまだ無い。

〈能楽論の研究〉

- 17 能勢朝次著 〔古代劇文学〕 (日本文学大系21) 河出書房 昭14・1
- 18 能勢朝次著 〔能楽研究〕 謡学界発行所 昭15・11〔再刊〕 能楽書林 昭27・7
- 19 野上豊一郎編 〔能の芸術理論〕 (能楽全書1) 創元社 昭18・3
- 20 能勢朝次著 〔能楽芸道〕 檜書店 昭29・10
- 21 小西甚一著 〔能楽論研究〕 塙書房 昭36・4 (昭42・11修訂)

能楽論そのものをわりあい直接的に研究した著書としては、右の諸書がある。21は体系的な解説として唯一のもので、その後の新しい研究によりさらに修正を要する点もあるが、いまのところ類書が出ていないので、いちおう挙げておく。

- 22 野上豊一郎著 〔能——研究と発見——〕 岩波書店 昭5・2
 - 23 野上豊一郎著 〔能の再生〕 岩波書店 昭10・1
 - 24 野上豊一郎著 〔能の幽玄と花〕 岩波書店 昭18・1
 - 25 能勢朝次著 〔幽玄論〕 河出書房 昭19・1
 - 26 西尾実著 〔日本文学史 中世のもの〕 東大出版会 昭29・3
 - 27 西尾実著 〔中世のものとその展開〕 岩波書店 昭36・12
 - 28 西尾実著 〔道元と世阿弥〕 岩波書店 昭40・11
- 能楽論そのものをあまり直接的に扱っていないけれども、その背景となる事ごらを知るためには、欠かせない研究書である。

〈伝記的研究〉

- 29 小林静雄著 〔謡曲作者の研究〕 丸岡出版社 昭17・11
 - 30 田中允編 〔本 四座役者目録〕 わんや書店 昭30・3
 - 31 野上豊一郎 〔観阿弥清次〕 要書房 昭24・5
 - 32 小林静雄著 〔世阿弥〕 檜書店 昭18・12 (昭33・7増補)
 - 33 田中允著 〔世阿弥〕 (アテネ文庫) 弘文堂 昭30・7
 - 34 香西精著 〔世阿弥新考〕 わんや書店 昭37・3
 - 35 西一祥著 〔世阿弥研究〕 さるびあ出版 昭42・5
- これらのうち、34は世阿弥と曹洞禅との関係を明らかにした点

で画期的の業績であるばかりでなく、伝書の難解な詞句を数多く解明した点でもすばらしい労作といえる。35の第二部「世阿弥研究書誌」は、明治三十一年から昭和四十年にいたる間の研究文献を網羅しており、わたくしのいま挙げるところよりも詳細な書誌を知りたいときは、ぜひこれを参照される必要がある。

〈歴史的研究〉

- 36 能勢朝次著 〔能楽源流考〕 岩波書店 昭13・11
- 37 森末義彰著 〔中世の社寺と芸術〕 畝傍書房 昭16・11
- 38 野上豊一郎編 〔能の歴史〕 (能楽全書2) 創元社 昭17・7
- 39 小林静雄著 〔能楽史研究〕 雄山閣 昭20・3
- 40 林屋辰三郎著 〔中世文化の基調〕 東大出版会 昭28・9
- 41 後藤淑著 〔中世的芸能の展開〕 明善堂書店 昭34・10
- 42 林屋辰三郎著 〔中世芸能史の研究〕 岩波新書 昭35・6
- 43 戸井田道三著 〔観阿弥と世阿弥〕 岩波新書 昭44・6
- 44 広瀬瑞弘著 〔能と金春〕 初音書房 昭44・12

〈雑〉

- 45 西尾実・田中允・金井清光・池田広司編 〔謡曲・狂言〕 (国語国文学研究史大成8) 三省堂 昭36・6
 - 46 芸能史研究会編 〔能——中世芸能の開花——〕 (日本の古典芸能3) 平凡社 昭45・3
- 〔雑誌・紀要の類に出ている論文は省略する。必要な向きは、前記35を参照されたい。〕